● 授業科目の内容紹介

音楽専攻

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
作品解釈Ａ	**2**		**音**	**1**	**和佐祐子**

Ⅰ　主題

この授業では、音楽関係論文、プログラム・ノート等において、作品の音楽的特徴を論理的かつ客観的に文章化するための方法論を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.研究対象となる作曲家及びその作品への理解が深められる。
2.プログラム・ノート等の執筆を通して、音楽の文章表現を身につけることができる。
3.作品に対する理解が深まることにより、新たな演奏の可能性が広がることを望む。

Ⅲ　授業の概要

主題・動機、形式（歌曲形式、ソナタ形式）等、楽式の確認をしながら、楽曲の分析を行い、その結果をプログラム・ノートに掲載するという設定で文章化していく。また作品を解説する上で必然となる作曲家の説明について、目的に沿った効果的な書き方を考える。それらに推敲、校正を重ねより質の高い、読み応えのある魅力的な文章の完成へと導く。講義後半は、各自の前期の実技試験曲について、楽曲分析を含む曲目解説文の執筆に向け準備する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. ガイダンス	授業内容等説明
2. 作曲家を説明する (1)	様々な文章の書き方と特徴
3. 作曲家を説明する (2)	執筆
4. 作曲家を説明する (3)	発表、批評
5. 主題・動機を説明する (1)	主題・動機について。楽曲分析
6. 主題・動機を説明する (2)	執筆、校正
7. 形式を説明する (1)	歌曲形式、ソナタ作品とソナタ形式
8. 形式を説明する (2)	楽曲分析、執筆
9. 形式を説明する (3)	執筆、校正
10. 形式を説明する (4)	発表、批評
11. プログラム・ノート作成 (1)	準備①（資料集め、資料研究）
12. プログラム・ノート作成 (2)	準備②（資料研究、楽曲分析）
13. プログラム・ノート作成 (3)	下書き執筆
14. プログラム・ノート作成 (4)	校正
15. まとめ	提出

Ⅴ　使用テキスト・教材等

教科書は使用せず、プリントを配布する。

Ⅵ　参考書・参考資料

各々のテーマについて、その都度参考文献を紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（レポート）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	
配点比率(%)　合計 100	50	15	15	20	
作曲家、作品に対する関心、理解	○	○	○	○	
作品に対する探究心	○	○	○	○	
レポート作成に対する意欲	○	○			
文章の論理的構成力	○	○			

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

資料収集、資料研究など、授業時間外も利用し積極的に取り組むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
作品解釈Ｂ	**2**		**音**	**1**	**和佐祐子**

Ⅰ　主題

「作品解釈Ａ」に引き続き、この授業では音楽関係論文、プログラム・ノート等において、作品の音楽的特徴を論理的かつ客観的に文章化するための方法論を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.研究対象となる作曲家及びその作品への理解が深められる。
2.プログラム・ノート等の執筆を通して、音楽の文章表現を身につけることができる。
3.作品に対する理解が深まることにより、新たな演奏の可能性が広がることを望む。

Ⅲ　授業の概要

声楽作品（歌曲、オペラ）の音楽的特徴をどのように説明し文章化するか、声楽作品特有の問題点に触れながら考察する。講義後半は、各自演奏会を企画し、プログラム作りをする。演奏会のテーマを設定し、それに沿ったプログラムを考え、数曲のプログラム・ノートの執筆に挑む。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. ガイダンス	授業内容の説明
2. 歌曲を説明する (1)	歌詞と楽曲
3. 歌曲を説明する (2)	詩と音楽との関係
4. 歌曲を説明する (3)	文章の推敲、校正
5. オペラを説明する (1)	オペラ台本と原作
6. オペラを説明する (2)	台本から音楽へ
7. オペラを説明する (3)	登場人物と人間関係、心理描写
8. オペラを説明する (4)	文章の推敲、校正
9. 演奏会を企画する (1)	演奏会のテーマ、プログラムを考える①
10. 演奏会を企画する (2)	プログラムを考える②
11. 演奏会を企画する (3)	プログラム・ノート執筆準備①（資料集め、資料研究）
12. 演奏会を企画する (4)	プログラム・ノート執筆準備②（資料研究、楽曲分析）
13. 演奏会を企画する (5)	執筆①（下書き）
14. 演奏会を企画する (6)	執筆②（推敲、校正）
15. まとめ	提出

Ⅴ　使用テキスト・教材等

教科書は使用せず、プリントを配布する。

Ⅵ　参考書・参考資料

各々のテーマについて、その都度参考文献を紹介する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（レポート）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	15	15	20	
作曲家、作品に対する関心、理解	○	○	○	○	
作品に対する探究心	○	○	○	○	
レポート作成に対する意欲	○	○			
文章の論理的構成力	○	○			

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

資料収集、資料研究など授業の時間外も利用し積極的に取り組むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
作品解釈Ｃ		**2**	**音**	**2**	**中田朱美**

Ⅰ　主題

19 世紀ロシア音楽

Ⅱ　授業の到達目標

1.19 世紀後半を中心に、ロシア音楽史の流れを具体的に捉えられる。
2.国民楽派として括られる作曲家の楽曲に共通する特徴と、それぞれの楽曲の独自性を踏まえながら、分析することができる。
3.創作事情、社会、思想性、音楽界、受容といった様々なコンテクストと照らし合わせながら、個々の楽曲を解釈できる。

Ⅲ　授業の概要

19 世紀ロシア音楽史をたどる。同時代に注目された、あるいは後世において盛んに受容された作品を取り上げ、さまざまな背景から捉えるマクロの視点と、形式や技法などのミクロの視点とを行き来しながら、作品を考察する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目		内　容
1.	導入	社会の近代化に伴う音楽文化の変化、18 世紀のロシア音楽
2.	グリンカ①	《カマーリンスカヤ》、民謡の収集と借用
3.	グリンカ②	《皇帝に捧げた命》、「ナロードナスチ（国民性・民族性）」の時代精神
4.	ダルゴムィシスキー	《石の客》、プーシキンとオペラ
5.	力強い一団	形成と活動経緯
6-7.	ムソルグスキー①	《ボリス・ゴドゥノフ》
8-9.	ムソルグスキー②	《展覧会の絵》
10.	ボロディン	《イーゴリ公》 ロシアにおけるオリエンタリズム
11-12.	チャイコフスキー①	《エヴゲーニイ・オネーギン》
13-14.	チャイコフスキー②	交響曲第 6 番
15.	リムスキー＝コルサコフ	民話オペラ
定期試験		筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

適宜、指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

ロシア音楽史:《カマーリンスカヤ》から《バービイ・ヤール》まで	フランシス・マース	春秋社	2006
ロシア音楽事典	日本・ロシア音楽家協会編	河合出版	2006

ほかは適宜、指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	25		25	
楽曲の音楽的特徴の理解	○	○		○	
社会的・思想的背景の考察	○	○		○	
音楽のもつ多面性の理解	○	○		○	
複数のコンテクストを交えた作品解釈	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

さまざまなメディアを通して、ロシア音楽に触れておくことが望ましい。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

ほぼ毎回の授業で書いてもらうコメント・シート、数回予定している分析の宿題などを通して、積極的な反応を期待する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
作品解釈Ｄ		**2**	**音**	**2**	**中田朱美**

Ⅰ　主題
20 世紀ロシア・ソヴィエト音楽

Ⅱ　授業の到達目標
1.世紀末から 20 世紀にかけて、ロシア・ソヴィエト音楽史の流れを具体的に捉えられる。
2.ロシア・ソヴィエトの作曲家たちを例に、世紀末から 20 世紀における音楽文化の国際的な動向を理解できる。
3.創作事情、社会、思想性、音楽界、受容といった様々なコンテクストを照らし合わせながら、個々の楽曲を解釈できる。

Ⅲ　授業の概要
前期につづいて、世紀末から20 世紀のロシア・ソヴィエト音楽史をたどる。同時代に注目された、あるいは後世において盛んに受容された楽曲を取り上げ、さまざまな背景から捉えるマクロの視点と、形式や技法などのクロの視点とを行き来しながら、作品を考察する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目		内容
1.	導入	革命前夜の音楽文化、資本家パトロンと国外進出
2.	スクリャービン	《プロメテウス》
3.	ストラヴィンスキー①	《ペトルーシカ》
4-5.	ストラヴィンスキー②	《春の祭典》
6.	ラフマニノフ①	《コレッリの主題による変奏曲》
7-8.	ラフマニノフ②	《パガニーニの主題による狂詩曲》
9.	プロコフィエフ①	ソ連音楽史概要、ピアノ・ソナタ
10.	プロコフィエフ②	《炎の天使》
11.	プロコフィエフ③	チェロと管弦楽のための交響的協奏曲
12.	ショスタコーヴィチ①	導入、《ムツェンスク郡のマクベス夫人》
13.	ショスタコーヴィチ②	交響曲第 5 番
14.	ショスタコーヴィチ③	ヴァイオリン協奏曲第 1 番
15.	ショスタコーヴィチ④	弦楽四重奏曲第 8 番
定期試験		筆記試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等
適宜、指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料
ロシア音楽史:《カマーリンスカヤ》から《バービイ・ヤール》まで　フランシス・マース　春秋社　2006
ロシア音楽事典　日本・ロシア音楽家協会編　河合出版　2006
ほかは適宜、指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	25		25	
楽曲の音楽的特徴の理解	○	○		○	
社会的・思想的背景の考察	○	○		○	
音楽のもつ多面性の理解	○	○		○	
コンテクストを捉えた作品解釈	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
さまざまなメディアを通して、ロシア・ソヴィエト音楽に触れておくことが望ましい。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
ほぼ毎回の授業で書いてもらうコメント・シートや宿題などでの積極的な反応を期待する。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
演奏様式論Ａ	**2**		**音**	**1**	**金子建志**

Ⅰ　主題

演奏様式の違いを、 楽譜や版の問題を含めて理解することを目指す。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ロマン派以降、構造的に重要度を増した技法について特徴と表現法を理解する。
2.循環形式、リズム主題、引用と象徴性について理解を深め、演奏や鑑賞の際に役立てるようにする。
3.作曲家が、何かの「象徴」や「記号」を意味するものとして使用した主題や動機の意味を理解できるようにする。

Ⅲ　授業の概要

楽譜の検証と並行して、受講生による合奏によって演奏様式を実際に体験させる。
ｽｺｱから直接演奏することで全体の構造を理解できるように努めるが、独奏曲や声楽曲などは、編曲によって対応させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 運命主題 一古典派の例	〈ドン・ジョヴァンニ〉終幕、交響曲〈100 番・軍隊〉
2.　同 ベートーヴェン・1	〈運命〉、〈エグモント〉序曲
3.　同 ベートーヴェン・2	〈エロイカ〉、〈第9〉、ピアノ・ソナタ〈熱情〉
4. 循環形式 ベルリオーズ	〈幻想交響曲〉 とイデー・フィクス
5.　同 シューマン	交響曲〈2番〉〈4番〉
6.〈運命〉の引用 メンデルスゾーン	《結婚行進曲》と《葬送行進曲》
7.　同 マーラー・1	交響曲第 5 番、私小説的な象徴性
8.　同 マーラー・2	〈巨人〉〈復活〉〈5番〉〈6番〉他
9.　同 ブラームス	交響曲〈1番〉〈4番〉、ピアノ・ソナタ
10.　同 チャイコフスキー	交響曲〈4番〉〈5番〉〈悲愴〉
11.「ロマネスカ」・1	古典派以前　パッヘルベル〈カノン〉、ヘンデル〈メサイア〉
12.　同・2 ベートーヴェン	交響曲〈第9〉、後期のピアノソナタ
13.　同・3 マーラー	〈巨人〉、ブラームスの〈2番〉との比較
14.　同・4 ワーグナー	〈パルジファル〉とスペイン起源
15.　同・5 ショスタコーヴィチ	交響曲第 12 番、終楽章の結論

Ⅴ　使用テキスト・教材等

使用せず

Ⅵ　参考書・参考資料

マーラーの交響曲	金子建志	音楽之友社	1994 年
マーラーの交響曲・2	金子建志	音楽之友社	2001 年

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	実技
配点比率(%)　合計 100	30	20	10	20	20
合奏に対する意欲	○		○	○	○
合奏に対する知識、理解度	○	○	○	○	○
演奏様式に対する好奇心と研究心	○	○	○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

スコアや CD で事前に研究しておくことが望ましい。合奏に際しては事前にスコアやパート譜で準備をしておくこと。楽器での履修者は、楽器での参加を義務づける。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

他学科履修で受講する場合は楽譜が読めることを前提とする。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
演奏様式論Ｂ	**2**		**音**	**1**	**金子建志**

Ⅰ　主題
演奏様式の違いを、楽譜や版の問題を含めて理解することを目指す。

Ⅱ　授業の到達目標
1.ロマン派以降の西欧音楽の方向性を決定づけた民族主義と印象派について特徴と表現法を理解する。
2.教会旋法、民族的な音階、変拍子等の開拓について理解を深め、演奏や鑑賞の際に役立てるようにする。
3.5音音階、機能和声や導音回避、4小節周期の否定、平行和音などを理解できるようにする。

Ⅲ　授業の概要
楽譜の検証と並行して、受講生による合奏によって演奏様式を実際に体験させる。
独奏曲やオペラなどは、編曲によって対応させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 5音音階と民族音楽・1	古典派の例　ハイドン交響曲〈〈104 番・ロンドン〉、民謡〈麦畑〉
2. 同・2	ベートーヴェン〈ラズモフスキー〉と、〈ボリス・ゴドゥノフ〉
3. 同・3	ブラームス〈ハンガリー舞曲〉とドヴォルジャーク《スラヴ舞曲》
4. 同・4	ドヴォルザーク〈アメリカ〉〈新世界より〉
5. 同・5	チャイコフスキー〈悲愴〉〈くるみ割り人形〉
6. 同・6	ムソルグスキー〈展覧会の絵〉とリムスキー＝コルサコフ
7. 同・7	マーラー　交響曲〈大地の歌〉〈9番〉
8. 同・8	ウェーバーとプッチーニ〈トゥーランドット〉
9. 同・9	バルトーク〈中国の不思議な役人〉〈管弦楽のための協奏曲〉タ
10. 印象派以降　・1	ドビュッシー　前奏曲集〈亜麻色の髪の乙女〉他
11. 同・2	〈海〉〈子供の領分〉〈ペレアスとメリザンド〉
12. 同・3	ラヴェル〈ボレロ〉〈ダフニスとクロエ〉〈ラ・ヴァルス〉
13. 同・4	ラヴェル　〈マ・メール・ロワ〉とピアノ協奏曲
14. 同・5	ラヴェル　〈展覧会の絵〉の管弦楽編曲
15. 同・6	伊福部昭と武満徹

Ⅴ　使用テキスト・教材等
使用せず

Ⅵ　参考書・参考資料
印象派以降　　柴田南雄　　音楽之友社　　1967 年

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	実技
配点比率(%)　合計 100	30	20	10	20	20
合奏に対する意欲	○		○	○	○
合奏に対する知識、理解度	○	○	○	○	○
演奏様式に対する好奇心と研究心	○	○	○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
スコアや CD で事前に研究しておくことが望ましい。合奏に際しては事前にスコアやパート譜で準備をしておくこと。楽器での履修者は、楽器での参加を義務づける。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他学科履修で受講する場合は楽譜が読めることを前提とする。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
演奏様式論C		**2**	**音**	**2**	**金子建志**

Ⅰ　主題

演奏様式の違いを、 楽譜や版の問題を含めて理解することを目指す。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ロマン派以降、構造的に重要度を増した技法について特徴と表現法を理解する。
2.循環形式、リズム主題、引用と象徴性について理解を深め、演奏や鑑賞の際に役立てるようにする。
3.作曲家が、何かの「象徴」や「記号」を意味するものとして使用した主題や動機の意味を理解できるようにする。

Ⅲ　授業の概要

楽譜の検証と並行して、受講生による合奏によって演奏様式を実際に体験させる。
ｽｺｱから直接演奏することで全体の構造を理解できるように努めるが、独奏曲や声楽曲などは、編曲によって対応させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 運命主題 一古典派の例	〈ドン・ジョヴァンニ〉終幕、交響曲〈100 番・軍隊〉
2. 同 ベートーヴェン・1	〈運命〉、〈エグモント〉序曲
3. 同 ベートーヴェン・2	〈エロイカ〉、〈第9〉、ピアノ・ソナタ〈熱情〉
4. 循環形式 ベルリオーズ	〈幻想交響曲〉 とイデー・フィクス
5. 同 シューマン	交響曲〈2番〉〈4番〉
6. 〈運命〉の引用 メンデルスゾーン	《結婚行進曲》と《葬送行進曲》
7. 同 マーラー・1	交響曲第 5 番、私小説的な象徴性
8. 同マーラー・2	〈巨人〉〈復活〉〈5番〉〈6番〉他
9. 同　ブラームス	交響曲〈1番〉〈4番〉、ピアノ・ソナタ
10. 同　チャイコフスキー	交響曲〈4番〉〈5番〉〈悲愴〉
11.「ロマネスカ」・1 古典派以前	パッヘルベル〈カノン〉、ヘンデル〈メサイア〉
12. 同・2　ベートーヴェン	交響曲〈第9〉、後期のピアノソナタ
13. 同・3　マーラー	〈巨人〉、ブラームスの〈2番〉との比較
14. 同・4　ワーグナー	〈パルジファル〉とスペイン起源
15. 同・5　ショスタコーヴィチ	交響曲第 12 番、終楽章の結論

Ⅴ　使用テキスト・教材等

使用せず

Ⅵ　参考書・参考資料

マーラーの交響曲	金子建志	音楽之友社	1994 年
マーラーの交響曲・2	金子建志	音楽之友社	2001 年

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	実技
配点比率(%)　合計 100	30	20	10	20	20
合奏に対する意欲	○		○	○	○
合奏に対する知識、理解度	○	○	○	○	○
演奏様式に対する好奇心と研究心	○	○	○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

スコアや CD で事前に研究しておくことが望ましい。合奏に際しては事前にスコアやパート譜で準備をしておくこと。楽器での履修者は、楽器での参加を義務づける。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

他学科履修で受講する場合は楽譜が読めることを前提とする。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
演奏様式論Ｄ		**2**	**音**	**2**	**金子建志**

Ⅰ　主題
演奏様式の違いを、楽譜や版の問題を含めて理解することを目指す。

Ⅱ　授業の到達目標
1.ロマン派以降の西欧音楽の方向性を決定づけた民族主義と印象派について特徴と表現法を理解する。
2.教会旋法、民族的な音階、変拍子等の開拓について理解を深め、演奏や鑑賞の際に役立てるようにする。
3.5音音階、機能和声や導音回避、4小節周期の否定、平行和音などを理解できるようにする。

Ⅲ　授業の概要
楽譜の検証と並行して、受講生による合奏によって演奏様式を実際に体験させる。
独奏曲やオペラなどは、編曲によって対応させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 5音音階と民族音楽・1	古典派の例　ハイドン交響曲〈〈104 番・ロンドン〉、民謡〈麦畑〉
2. 同・2	ベートーヴェン〈ラズモフスキー〉と、〈ボリス・ゴドゥノフ〉
3. 同・3	ブラームス〈ハンガリー舞曲〉とドヴォルジャーク《スラヴ舞曲》
4. 同・4	ドヴォルザーク〈アメリカ〉〈新世界より〉
5. 同・5	チャイコフスキー〈悲愴〉〈くるみ割り人形〉
6. 同・6	ムソルグスキー〈展覧会の絵〉とリムスキー＝コルサコフ
7. 同・7	マーラー　交響曲〈大地の歌〉〈9番〉
8. 同・8	ウェーバーとプッチーニ〈トゥーランドット〉
9. 同・9	バルトーク〈中国の不思議な役人〉〈管弦楽のための協奏曲〉タ
10. 印象派以降　・1	ドビュッシー　前奏曲集〈亜麻色の髪の乙女〉他
11. 同・2	〈海〉〈子供の領分〉〈ペレアスとメリザンド〉
12. 同・3	ラヴェル〈ボレロ〉〈ダフニスとクロエ〉〈ラ・ヴァルス〉
13. 同・4	ラヴェル　〈マ・メール・ロワ〉とピアノ協奏曲
14. 同・5	ラヴェル　〈展覧会の絵〉の管弦楽編曲
15. 同・6	伊福部昭と武満徹

Ⅴ　使用テキスト・教材等
使用せず

Ⅵ　参考書・参考資料
印象派以降　　柴田南雄　　音楽之友社　　1967 年

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	実技
配点比率(%)　合計 100	30	20	10	20	20
合奏に対する意欲	○		○	○	○
合奏に対する知識、理解度	○	○	○	○	○
演奏様式に対する好奇心と研究心	○	○	○	○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
スコアや CD で事前に研究しておくことが望ましい。合奏に際しては事前にスコアやパート譜で準備をしておくこと。楽器での履修者は、楽器での参加を義務づける。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他学科履修で受講する場合は楽譜が読めることを前提とする。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
比較演奏論Ａ	**2**		**音**	**1**	**金子建志**

Ⅰ　主題

G. グールドを中心に、他の演奏家と録音や映像を比較し、特徴を分析する。個性的な解釈の実像を把握し、学生自身の演奏に役立てることを目標とする。
また、演奏者の使用楽譜の違いについて注意を払う必要があることを認識させるため、資料批判についての初歩的な知識も学んでもらう。

Ⅱ　授業の到達目標

1.意図的なデフォルメと、パロディ的な主張の分析ができる。
2.徹底したポリフォニー嗜好と、極限的なテンポの意図するものを探る。
3.コピー的な解釈から離脱し、創造的な姿勢を自らの演奏に活かす。

Ⅲ　授業の概要

グールドを含めた複数の演奏家の録音を比較し、交代しながら発表させる。
演奏の表面的な違いの発見に留まることなく、その理由を考察させ、楽譜の違いも含めて、検討させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.グールドの全体像と特徴	解釈と奏法の分析
2.レコーディングの実際	生前の録音風景から窺える個性
3.バッハ〈イタリア協奏曲〉	テラーセン・デュナミークについて
4.ヴィヴァルディとバッハ	イタリア風協奏曲の系譜
5.チェンバロ的奏法	チェンバロとピアノの構造的な違い
6.バッハ〈ゴルトベルク変奏曲〉・1	2 回の録音の共通点
7.　　〈ゴルトベルク変奏曲〉・2	装飾音とアルペジョ
8.　　〈ゴルトベルク変奏曲〉・3	2段鍵盤と、ピアノでの超絶技巧
9.バッハ〈平均律クラヴィーア曲集〉	装飾か編曲か
10.モーツァルトのソナタ・1	K.331〈トルコ行進曲〉の解釈
11.モーツァルトのソナタ・2	ソナタ・イ短調　K.310 の解釈
12.ベートーヴェンのソナタ・1	作品 31・2〈テンペスト〉の解釈
13.ベートーヴェンのソナタ・2	同、2つの映像の分析。意図の解明
14.ベートーヴェンのソナタ・3	作品 31・1　ト長調の解釈
15.ベートーヴェンの〈皇帝〉	ソリスト対指揮者。アンチェル、ストコフスキーとの共演。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

使用せず

Ⅵ　参考書・参考資料

グレン・グールド変奏曲	マグリーヴィ編	東京創元社
バロックから初期古典派までの音楽の奏法	橋本英二著	音楽之友社
グレン・グールド、音楽、精神	ペイザント著	音楽之友社

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（レポート）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	授業態度	その他(実技)
配点比率(%)　合計 100	50	10	20	20	
グールドの演奏に対する知識、理解度	○	○	○	○	
演奏表現に関する好奇心と研究心	○	○	○	○	
既成概念を疑うことと、個性の重要性	○	○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

グールドの CD を事前に試聴しておくのは当然だが、一般的な演奏を聴いて、スタンダードな解釈について予習しておくことが望ましい。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

他学科履修で受講する場合は楽譜が読めることを前提とする。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
比較演奏論Ｂ		**2**	**音**	**1**	**金子建志**

Ⅰ　主題

ベートーヴェンの交響曲第 9 番を取り上げ、使用楽譜と演奏様式の両面から指揮者やオーケストラによる解釈の特徴を比較・分析する。それを通じて、資料批判の基本を習得し、演奏する際に楽譜選択を重視する姿勢を身に着けることを目標とする。
また、近年の演奏表現の傾向や、その系譜について認識を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自筆スコアから初版までの経緯。ベートーヴェンの特殊性 を理解する。
2.19 世紀に権威づけられた旧全集版の問題点と、時代様式を把握する。
3.古楽器オケの挑戦と、新版による新たな展開を理解し、自らの演奏に活かす。

Ⅲ　授業の概要

自筆スコアを始めとする第一次資料で細部を比較し、実際の演奏との関係を探る。
学生一人ひとりに、それぞれ違う演奏家による CD を担当させ、その特徴を把握させることで、同一傾向の演奏解釈を理解させる。それを前提に、次の段階として、異なった解釈との違いの原因を把握させ、演奏の多様性について理解を深めるようにさせる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.自筆スコア、献呈稿、初版の相違点。	第一次資料から明らかになる問題点
2.テンポとメトロノームの問題点・1	第4楽章冒頭
3.テンポとメトロノームの問題点・2	第2楽章のトリオ
4.テンポとメトロノームの問題点・3	第4楽章のトルコ行進曲
5.テンポとメトロノームの問題点・4	第4楽章のコーダ
6.音の違い・1	第1楽章の第 2 主題
7.音の違い・2	第4楽章トルコ行進曲後半のホルン
8.オーケストレーション・1	金管　第4楽章冒頭と二重フーガ
9.オーケストレーション・2	金管　第1・第2楽章のホルン
10.オーケストレーション・3	ヴァイオリンとフルートの高音
11.オーケストレーション・4	〈英雄〉や〈運命〉と共通の問題点
12.オーケストレーション・5	ワーグナー、マーラーなどの編曲
13.デュナミーク	第4楽章 vor　Gott のフェルマータ
14.和音と転調の原型	ルーツとしての〈合唱幻想曲〉
15.新原典版の問題点	新原典版どうしの相違と矛盾

Ⅴ　使用テキスト・教材等

音楽之友社版スコア
ベーレンライター版のスコア
プリントと CD、DVD

Ⅵ　参考書・参考資料

ベートーヴェンの〈第9〉	金子建志著	音楽之友社	1996 年
交響曲の名曲・1	金子建志著	音楽之友社	1997 年
マーラーの交響曲	音楽之友社	音楽之友社	1994 年

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（レポート）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(実技)
配点比率(%)　　合計 100	50	10	30	20	
〈第9〉の演奏に対する知識、理解度	○	○	○	○	
楽譜と演奏の違い関する研究心	○	○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各自に違う指揮者の CD を複数配布するので、違いを予習的に聴いておくことを原則とする。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

他学科履修で受講する場合は楽譜が読めることを前提とする。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
和声研究Ａ		**2**	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

本科で学んだ和声学を基に和声学をより深く研究。シャラン 380 の課題の第3巻の実施。

Ⅱ　授業の到達目標

1.フランス和声の把握をし、音楽の面白さを深め、課題を実施できるようになる。
2.属七和音の把握をし、活用できるようになる。
3.転調の把握をし、活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた知識を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目　内　容

1.～4.　シャラン 380 の課題第三巻の実施と解説Ⅰ（受講学生数と同数の課題）

5.　発表Ⅰ　実施した課題を演奏してもらう

6. ～8.　前回の続き、シャラン 380 の課題第三巻の実施と解説Ⅱ（受講学生数と同数の課題）

9.　発表Ⅱ　実施した課題を演奏してもらう

10.～12.　前回に引き続き、シャラン 380 の課題第三巻の実施と解説Ⅲ（受講学生数と同数の課題）

13.　発表Ⅲ　実施した課題を演奏してもらう

14&15.　まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

シャラン 380 の課題の第3巻（授業内でプリントを配布）

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
フランス和声の把握	○			○	
属七和音の把握	○			○	
転調の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

シャラン 380 の課題の他の問題を実施

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
和声研究Ｂ		**2**	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題
前期に引き続き和声学をより深く研究し作品の創作かつ演奏に役立てる。シャラン 380 の課題の第3.4巻の実施。

Ⅱ　授業の到達目標
1.フランス和声の把握を深め、より一層自己の音楽を広げ、課題の実施に活用できるようになる。
2.副七和音の把握をし、活用できるようになる。
3.転調の把握をし、活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要
授業内で身につけた知識を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容
項　目　内　容

1.～4.　シャラン 380 の課題第四巻の実施と解説Ⅰ（受講学生数と同数の課題）

5.　発表Ⅰ　実施した課題を演奏してもらう

6.～8.　前回の続き、シャラン 380 の課題第四巻の実施と解説Ⅱ（受講学生数と同数の課題）

9.　発表Ⅱ　実施した課題を演奏してもらう

10.～12.　前回に引き続き、シャラン 380 の課題第四巻の実施と解説Ⅲ（受講学生数と同数の課題）

13.　発表Ⅲ　実施した課題を演奏してもらう

14&15.　まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等
シャラン 380 の課題の第3.4巻（授業内でプリントを配布）

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
フランス和声の把握	○			○	
副七和音の把握	○			○	
転調の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
シャラン 380 の課題の他の問題を実施

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
作曲技法Ａ		**2**	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

バロック時代の代表的な楽曲を分析し、対位法的楽曲を自ら創作し、自己の演奏に反映させる。バロック時代に関する知識を高める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.Polyphony の把握をし、創作に活用できるようになる。
2.全和音記号の把握をし、創作に活用できるようになる。
3.Huga の把握をし、創作に活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた創作力を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　　容
1. 基礎知識Ⅰ	和音記号などの確認
2. 基礎知識Ⅱ	非和声音などの確認
3. 厳格対位法Ⅰ	2声対位法第1類の把握
4. 厳格対位法Ⅱ	2声対位法第2類の把握
5. 厳格対位法Ⅲ	2声対位法第3類の把握
6. 厳格対位法Ⅳ	2声対位法第4類の把握
7. 厳格対位法Ⅴ	2声対位法第5類の把握
8. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅰ	学生が創って来たものについての指導
9. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅱ	学生が創って来たものについての指導
10. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅲ	学生が創って来たものについての指導
11. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅳ	学生が創って来たものについての指導
12. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅴ	学生が創って来たものについての指導
13. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅵ	学生が創って来たものについての指導
14. 自由な編成による2声対位法的楽曲の創作Ⅶ	学生が創って来たものについての指導
15. 作品発表	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

授業内で配布

Ⅵ　参考書・参考資料

対位法　　″ノエル=ギャロン″″マルセル・ビッチュ″　″矢代 秋雄″　　音楽之友社
厳格対位法　　山口 博史　　音楽之友社

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
Polyphony の把握	○			○	
全和音記号の把握				○	
Huga の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

上記に提示した参考書を熟読する

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
作曲技法Ｂ		**2**	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

学生の感動した作品の分析をし、自由な発想による自由な編成で作品を創作する。授業の最後には、発表をする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.Homophony の把握をし、創作に活用できるようになる。
2.全和音記号の把握を更に深め、創作に活用できるようになる。
3.形式の把握をし、創作に活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた創作力を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 分析する楽曲を決める	
2. 楽曲の分析Ⅰ	学生が感動した曲の分析
3. 楽曲の分析Ⅱ	学生が感動した曲の分析
4. 楽曲の分析Ⅲ	学生が感動した曲の分析
5. 楽曲の分析Ⅳ	学生が感動した曲の分析
6. 楽曲の分析Ⅴ	学生が感動した曲の分析
7. 自由な編成による楽曲の創作Ⅰ	学生が創って来たものについての指導
8. 自由な編成による楽曲の創作Ⅱ	学生が創って来たものについての指導
9. 自由な編成による楽曲の創作Ⅲ	学生が創って来たものについての指導
10. 自由な編成による楽曲の創作Ⅳ	学生が創って来たものについての指導
11. 自由な編成による楽曲の創作Ⅴ	学生が創って来たものについての指導
12. 自由な編成による楽曲の創作Ⅵ	学生が創って来たものについての指導
13. 自由な編成による楽曲の創作Ⅶ	学生が創って来たものについての指導
14. 自由な編成による楽曲の創作Ⅷ	学生が創って来たものについての指導
15. 作品発表	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

分析する作品の楽譜

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	20		30	50	
Homophony の把握	○		○	○	
全和音記号の把握				○	
形式の把握	○		○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

興味を持った様々な楽曲の楽譜を熟読する

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
伴奏研究Ａ	**〔1〕**		**音**	**1**	**小林秀子**

Ⅰ　主題
声楽曲、器楽曲の伴奏演奏,アンサンブル演奏を行い伴奏の基本を体験する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.声楽曲、器楽曲の伴奏演奏,アンサンブル演奏をとおして基本的な伴奏法を習得することを目指す。
2.楽器の特性、声の性質を理解する。
3.音楽全般の理解を深め視野を拡げる.

Ⅲ　授業の概要
授業では各自で用意した自由曲と伴奏課題曲の演奏をグループレッスン形態で行う。
楽器の特徴、声楽の性質についてのプレゼンテーションを毎授業でおこなう。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	伴奏法の概説	課題曲の選曲、共演者の決定、プレゼンテーションの日程調整。
2～4	伴奏演奏表現(1)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。
5～7	伴奏演奏表現(2)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。
8～10	伴奏演奏表現(3)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。
11～15	伴奏演奏表現(4)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
専攻にあわせて楽曲、アンサンブル課題などを適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノ伴奏演奏技術	○	○		○	
楽曲、声質、楽器への理解と研究心	○	○		○	
アンサンブルの理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
グループレッスンにより他のペアの演奏曲目も同時に学ぶ。
成績評価方法の補足:
平常の課題曲の演奏、授業への取り組み、出席・受講状況、楽器および声楽のパートの特性についてのプレゼンテーションの内容、前期実技試験。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
伴奏研究Ｂ	**〔1〕**		**音**	**1**	**小林秀子**

Ⅰ　主題

声楽曲、器楽曲の伴奏演奏,アンサンブル演奏を行い伴奏の基本を体験する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.声楽曲、器楽曲の伴奏演奏、アンサンブル演奏をとおして基本的な伴奏法を習得することを目指す。
2.楽器の特性、声楽の声質を理解する。
3.音楽全般の理解を深め視野を拡げる.

Ⅲ　授業の概要

授業では各自で用意した自由曲と伴奏課題曲の演奏をグループレッスン形態で行う。
楽器の特徴、声楽の特性についてのプレゼンテーションを毎授業でおこなう。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	伴奏法の概説	課題曲の選曲、共演者の決定、プレゼンテーションの日程調整。
2～ 4	伴奏演奏表現(1)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。
5～ 7	伴奏演奏表現(2)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。
8～10	伴奏演奏表現(3)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。
11～15	伴奏演奏表現(4)	作品の内容、時代背景を考え演奏表現の向上を図る。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

専攻にあわせて楽曲、アンサンブル課題などを適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノ伴奏演奏技術・	○	○		○	
楽曲、声質、楽器への理解と研究心	○	○		○	
アンサンブルの理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

グループレッスンにより他のペアの演奏曲目も同時に学ぶ。
成績評価方法の補足:
平常の課題曲の演奏、授業への取り組み、出席・受講状況、楽器および声楽のパートの特性についてのプレゼンテーションの内容、後期実技試験。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
楽書講読Ａ		〔2〕	**音**	**1**	**中田朱美**

Ⅰ　主題

これから修了論文や演奏試験に向けて役立ちそうな英語資料を各人で取り上げ、書かれた内容を理解し、演奏や作品理解に反映させる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.テキストに書かれた内容を正しく理解することができる。
2.文意を汲んだ分かりやすい日本語に訳すことができる。
3.一般的な単語とあわせて、楽語の語彙を増やす。

Ⅲ　授業の概要

文法を確認しながら英語のテキストをゆっくりと丁寧に読み進める。毎回の授業で、各履修者が取り上げるテキストを推敲・熟読する。

Ⅳ　授業計画と内容

1　　ガイダンス、希望テーマのチェック、研究資料の見つけ方
2　　テキスト入手状況のチェック、テキストの輪読
3-30　テキストの輪読

Ⅴ　使用テキスト・教材等

初回時に確認する。

Ⅵ　参考書・参考資料

適宜、指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		20	50	30	
テキスト内容の美学的考察		○	○	○	
音楽のもつ多面性の理解		○	○	○	
英文和訳の日本語の美しさ		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

希望テキストの訳を毎回準備してくること。また授業毎、清書することをお勧めする。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

毎回、英和辞典を持参すること(電子辞書、紙媒体を問わない)。ただし、授業中の携帯電話によるネット検索は控えること。また録音も原則として認めない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
楽書講読Ｂ		〔2〕	**音**	**2**	**中田朱美**

Ⅰ　主題
修了論文や演奏試験に向けて役立ちそうな英語資料を各人で取り上げ、書かれた内容を理解し、演奏や作品理解に反映させる。

Ⅱ　授業の到達目標
1.テキストに書かれた内容を正しく理解することができる。
2.文意を汲んだ分かりやすい日本語に訳すことができる。
3.一般的な単語とあわせて、楽語の語彙を増やす。

Ⅲ　授業の概要
文法を確認しながら英語のテキストをゆっくりと丁寧に読み進める。毎回の授業で、各履修者が取り上げるテキストを推敲・熟読する。

Ⅳ　授業計画と内容
1　　ガイダンス、希望テーマのチェック、研究資料の見つけ方
2　　テキスト入手状況のチェック、テキストの輪読
3-30　テキストの輪読

Ⅴ　使用テキスト・教材等
初回時に確認する。

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		20	50	30	
テキスト内容の美学的考察		○	○	○	
音楽のもつ多面性の理解		○	○	○	
英文和訳の日本語の美しさ		○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
希望テキストの訳を毎回準備してくること。また授業毎、清書することをお勧めする。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
毎回、英和辞典を持参すること(電子辞書、紙媒体を問わない)。ただし、授業中の携帯電話によるネット検索は控えること。また録音も原則として認めない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
イタリア語研究		〔2〕	**音**	**1**	**青木洋一郎**

Ⅰ　主題

西洋音楽の理解に不可欠な言語であるイタリア語の理解を更に進めることを狙いとするが、それを通じて、言語学的発想を身に付け、また、西欧文化の特質の理解を深めることによって、自らの音楽研究の質を高め、人生を豊かにしていきたい。

Ⅱ　授業の到達目標

1.イタリア語の基本的な形態論を習得して、動詞を正しく速やかに活用させることができるようになる。
2.非強勢形代名詞をはじめとするイタリア語の統語論の性質を理解して、正しく解釈できるようになる。
3.学習した文法を踏まえ、辞書を頼りに独力で原文を味わえるようになる。

Ⅲ　授業の概要

この授業では、本科での学習成果を基に、イタリア語とその文法の理解を深めたい。様々な代名詞類や再帰動詞はもちろん、動詞の様々な法・時制の理解と習得を目標としたい。差し当たり教科書の例文を中心に学習するが、語彙・語法を補うためもあり、授業の進み具合に応じて音声・映像教材や補助プリント等も活用する予定である。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目		内　容
01.	オリエンテーション	既習事項の確認
02-03.	Lezione 9	直説法現在　重要な不規則変化 1
04-05.	Lezione 10	直説法現在　重要な不規則変化 2
06-08.	Lezione 11	目的語人称代名詞、代名小辞 ne
09-11.	Lezione 12	再帰動詞、代名小辞 ci
12-14.	Lezione 13	比較級と最上級、関係代名詞
15.	まとめ	前期のおさらい
16-18.	Lezione 14	直説法近過去
19-21.	Lezione 15	直説法半過去・大過去
22-24.	Lezione 16	直説法遠過去・前過去
25-27.	Lezione 17	命令法
28-29.	Lezione 18	直説法未来・前未来
30.	まとめ	後期のおさらい

Ⅴ　使用テキスト・教材等

基礎イタリア語：表と例文	青木洋一郎	DTP 出版	2012	9784862113351

Ⅵ　参考書・参考資料

イタリア語の ABC	長神悟	白水社	2003
プリーモ伊和辞典	秋山余思　監修	白水社	2011

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	60	10		30	
動詞形態論の習得	○	○		○	
統語論の理解	○			○	
読解力	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業前には辞書を引いて教科書やプリントの予習をし、授業後にはノートのまとめや自主的な活用練習などの復習をすること。不明な点があれば、教師に質問したり、参考書にあたるなどして必ず確認すること。また、日頃から、テレビ、ラジオ、ネットなどのイタリア情報に積極的に触れておくことが望ましい。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

受講者がイタリア語の既修者でない場合、教科書の第 1 課から第 6 課までを参考書をもとに自習しておくこと。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
英語研究		〔2〕	**音**	**1**	**鈴木克義**

Ⅰ 主題
専攻科生が将来一人で海外に留学や滞在ができるよう、実践的な生活英語の演習を行う

Ⅱ 授業の到達目標
1.団体ではなく個人で滞在先の事情を調べ、日程や宿泊先の手配ができるようにする
2.チケットの購入やレストランでの注文など、英語でこなせる力を身につける
3.海外生活・海外留学の様子を収録したビデオ等で、海外の事情を理解する

Ⅲ 授業の概要
毎回テキストの会話を学び、口頭練習するほか、ビデオを視聴した感想などのメール課題を何回か書いてもらう。
グループでテーマを決め、英語と音楽に関する研究発表を各学期ごとに行う。

Ⅳ 授業計画と内容
1 オリエンテーション、ビデオ
2- 3 On a Flight
4- 5 Immigration and Customs
6- 7 Checking in at a Hotel/Seeing the Room
8- 9 Guest Services/Checking Out
10-11 Tourist Information/Taking a City Bus
12-13 Taking a Taxi/Renting a Car
14-15 Asking Directions/At a Museum
16 海外生活に関するビデオ／映画など
17-18 At a Golf Shop/Going to the Theater
19-20 At a Department Store/Shopping for a Souvenir
21-22 Breakfast/Lunch at a Fast-Food Place
23-24 Making a Dinner Reservation/At a Restaurant
25 クリスマスパーティー
26-27 At a Post Office/Making a Phone Call
28-29 Lost and Found/Going to a Doctor
30 まとめ

Ⅴ 使用テキスト・教材等
First Time Abroad 初めての海外旅行　佐藤公雄編著　成美堂　9784791945382

Ⅵ 参考書・参考資料

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100			50	50	
海外生活に必要な英語の理解				○	
生活会話の暗唱、メール課題			○		
英語と音楽に関する研究発表			○		

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）
知らない単語・表現等があったら予習して来ること。DVD がほしい場合はコピー可。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）
・メール課題の提出や質問などは、次のアドレスに送るように。
・授業に遅れたり休んだりする場合も、メールで理由つきで知らせること。
ongakusenkou@gmail.com

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
コーラスＡ		**〔2〕**	**音**	**1**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題
様々な様式の合唱曲を通じて視野を広げ、幅広い音楽的感覚を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.集中し、声と心を合わせて演奏する。
2.純粋な和声感を習得し、音楽的広がりを作る。
3.発声や発音、歌唱表現を正確に実践する。

Ⅲ　授業の概要
様々な合唱曲を歌い、理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目		内　容
1	ガイダンス１	パート分け
2－ 3	日本語などによる合唱曲(I)	音取り練習
4－ 5	日本語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
6－ 7	ラテン語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
8－ 9	ラテン語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
10－11	ドイツ語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
12－13	ドイツ語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
14－15	前期曲のまとめ	楽曲練習
16－20	前期曲の発展的練習	楽曲を仕上げる
21	ガイダンス２	グループ分け
22－24	その他の言語による合唱曲(I)	音取り練習
25－27	その他の言語による合唱曲(II)	楽曲練習
28－29	後期のまとめ	楽曲練習
30	発表	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が指示する

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%			60	40	
音楽的表現力			○	○	
和声感			○	○	
舞台語発音			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
事前に音取りをし、読み方を予習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
私語厳禁。欠席、遅刻の扱いについては、初回の授業で明示する。
楽譜の製本をすること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
コーラスB		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題
様々な様式の合唱曲を通じて視野を広げ、幅広い音楽的感覚を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.集中し、声と心を合わせて演奏する。
2.純粋な和声感を習得し、音楽的広がりを作る。
3.発声や発音、歌唱表現を正確に実践する。

Ⅲ　授業の概要
様々な合唱曲を歌い、理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目		内　容
1	ガイダンス１	パート分け
2－ 3	日本語などによる合唱曲(I)	音取り練習
4－ 5	日本語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
6－ 7	ラテン語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
8－ 9	ラテン語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
10－11	ドイツ語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
12－13	ドイツ語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
14－15	前期曲のまとめ	楽曲練習
16－20	前期曲の発展的練習	楽曲を仕上げる
21	ガイダンス２	グループ分け
22－24	その他の言語による合唱曲(I)	音取り練習
25－27	その他の言語による合唱曲(II)	楽曲練習
28－29	後期のまとめ	楽曲練習
30	発表	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が指示する

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%			60	40	
音楽的表現力			○	○	
和声感			○	○	
舞台語発音			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
事前に音取りをし、読み方を予習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
私語厳禁。欠席、遅刻の扱いについては、初回の授業で明示する。
楽譜の製本をすること。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
アンサンブルＡ（声楽）	**〔2〕**		**音**	**1**	**岩下晶子**

薩川美和子

Ⅰ　主題
アンサンブルの実践を通して、独唱にはない多彩な音楽的表現を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.純粋なハーモニーを習得し、実践する。
2.詩の内容や背景、役柄の理解を通して、各自の表現の幅を広げる。
3.率先してアンサンブルをまとめ、より完成された演奏をする。

Ⅲ　授業の概要
重唱曲によるアンサンブルを演奏する。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	ガイダンスⅠ	選曲
2－ 5	宗教的・世俗的重唱曲Ⅰ	音取り練習
6－ 9	宗教的・世俗的重唱曲Ⅱ	基礎的実習
10－13	宗教的・世俗的重唱曲Ⅲ	発展的実習
14	前期曲のまとめ	
15	発表（第１回）	
16	ガイダンスⅡ 選曲	
17－20	オペラ・ミュージカル重唱曲Ⅰ	音取り練習
21－24	オペラ・ミュージカル重唱曲Ⅱ	礎的実習
25－28	オペラ・ミュージカル重唱曲Ⅲ	発展的実習
29	後期曲のまとめ	
30	発表（第２回）	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		10	50	40	
楽曲に対する理解		○	○	○	
基本的な表現力			○	○	
舞台でのマナーの習得			○	○	
コミュニケーション能力			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音取りや言葉の読み、意味調べは、事前に各自が行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
アンサンブルは大人数での演習です。欠席は、基本的に認めません。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
アンサンブルA（ピアノ）	〔2〕		**音**	**1**	**小林秀子**

吉永哲道

Ⅰ　主題
ピアノデュオ,2台ピアノ作品に取り組み、アンサンブルに親しむ。

Ⅱ　授業の到達目標
1.ピアノデュオの楽しさと、アンサンブルの基本的な演奏表現技術を修得する。
2.ピアノソロと同様に音楽全般の理解・視野を拡げる.
3.ピアノアンサンブルの演奏様式の理解を深める。

Ⅲ　授業の概要
個別実技指導を行う。その指導内容は各個々のグループの演奏能力、準備の段階、コメントに対する順応力により決められる。各組が任意に選んだ2台ピアノ作品の演奏を通じて、お互いの演奏を聴き合いながら、音楽の全体像を作り上げていく。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.　概説	選曲、共演者の決定。
2～ 5. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
5～ 7. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
8～10. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
11～15. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
16～19 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
20～23. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
24～27. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
28～30. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
コースや専攻学生の進度にあわせて楽曲を適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、担当教員が
決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
アンサンブルに対する意欲、理解度	○			○	
演奏様式に対する研究	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
グループレッスンにより他のペアの演奏曲目も同時に学ぶ。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
アンサンブルＡ（管弦打）	**〔2〕**		**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆、野津如弘

Ⅰ　主題

管弦打楽器に必要不可欠なアンサンブル能力の涵養を図る。

Ⅱ　授業の到達目標

1.柔軟かつ高度なアンサンブル能力を養う。
2.自分のパートだけではなく他楽器に対する理解を高めて、演奏における能力向上を図る。
3.アンサンブルを通じて、学生同士のコミュニケーション能力向上をはかり社会性を養う。

Ⅲ　授業の概要

A.管弦打楽器による合奏　B.フルートを中心とした小編成による合奏
（上記 A.B 間において、学生は適宜移動して授業を受講する）

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.　授業説明	年間予定、成績評価方法についての説明、教材としての楽譜準備
2～ 4.　合奏	比較的容易な古典的楽曲の練習 A.B
4～ 6.　合奏	比較的容易な古典的楽曲の練習 C.D
7～ 9.　合奏	比較的容易な古典的楽曲の練習 E.F
10～11. 合奏	比較的高度な近代的楽曲練習 A.B.C
12～13. 合奏	比較的高度な近代的楽曲練習 D.E.F
14～15. 合奏	前期授業における総まとめを行う。
16～19. 合奏	初見試奏の実施、楽曲練習 G.H
20～22. 合奏	初見試奏の実施、楽曲練習 I.J
23～26. 合奏	初見試奏の実施、楽曲練習 K.L
27～28. 合奏	楽曲練習 G.H.I.J.K.L
29～30. 合奏	楽曲練習 G.H.I.J.K.L　総まとめを行い、定期演奏会を実施する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲を教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

演奏会で行う楽曲は、教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100				100	
合奏への理解と技術				○	
合奏におけるコミュニケーション				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

演奏会を欠席の場合には基本的に単位を与えない。授業計画はあくまで目安である。急遽演奏会等が入ることにより、授業運営・日程・時間に変更が生じることがある。合奏においては各自のコミュニケーションも重要である。その点も重視して授業運営を行う。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
アンサンブルB（声楽）	〔2〕		**音**	**2**	**岩下晶子**

薩川美和子

Ⅰ　主題
アンサンブルの実践を通して、独唱にはない多彩な音楽的表現を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.純粋なハーモニーを習得し、実践する。
2.詩の内容や背景、役柄の理解を通して、各自の表現の幅を広げる。
3.率先してアンサンブルをまとめ、より完成された演奏をする。

Ⅲ　授業の概要
重唱曲によるアンサンブルを演奏する。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	ガイダンスⅠ	選曲
2－ 5	宗教的・世俗的重唱曲Ⅰ	音取り練習
6－ 9	宗教的・世俗的重唱曲Ⅱ	基礎的実習
10－13	宗教的・世俗的重唱曲Ⅲ	発展的実習
14	前期曲のまとめ	
15	発表（第１回）	
16	ガイダンスⅡ 選曲	
17－20	オペラ・ミュージカル重唱曲Ⅰ	音取り練習
21－24	オペラ・ミュージカル重唱曲Ⅱ	基礎的実習
25－28	オペラ・ミュージカル重唱曲Ⅲ	発展的実習
29	後期曲のまとめ	
30	発表（第２回）	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		10	50	40	
楽曲に対する理解		○	○	○	
基本的な表現力			○	○	
舞台でのマナーの習得			○	○	
コミュニケーション能力			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音取りや言葉の読み、意味調べは、事前に各自が行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
アンサンブルは大人数での演習です。欠席は、基本的に認めません。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
アンサンブルB（ピアノ）	〔2〕		**音**	**2**	**小林秀子**

吉永哲道

Ⅰ　主題

ピアノデュオ,2台ピアノ作品に取り組み、アンサンブルに親しむ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ピアノデュオの楽しさと、アンサンブルの基本的な演奏表現技術を修得する。
2.ピアノソロと同様に音楽全般の知識・視野を拡げる.
3.ピアノアンサンブルの演奏様式への理解を深める。

Ⅲ　授業の概要

個別実技指導を行う。ピアノデュオの作品を古典、ロマン派、近・現代の作品からとりあげる。ピアノデュオ演奏の基本的な演奏技術、正確な解釈と演奏の実践、リズム感の安定と流動性、音色、アーテュキレーション、アゴーギック、ディナーミック、バランスの調整等。お互いに、相手のパートを熟知しながら、音楽の全体像をとらえる。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1.　概説	選曲、共演者の決定。
2～5.　演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
5～7.　演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
8～10. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
11～15. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
16～19　演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
20～23. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
24～27. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
28～30. 演奏表現	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

コースや専攻学生の進度にあわせて楽曲を適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
アンサンブルに対する意欲、理解度	○			○	
演奏様式に対する研究	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

グループレッスンにより他のペアの演奏曲目も同時に学ぶ。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
アンサンブルB（管弦打）	**〔2〕**		**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、野津如弘

Ⅰ　主題
管弦打楽器に必要不可欠なアンサンブル能力の涵養を図る。

Ⅱ　授業の到達目標
1.柔軟かつ高度なアンサンブル能力を養う。
2.自分のパートだけではなく他楽器に対する理解を高めて、演奏における能力向上を図る。
3.アンサンブルを通じて、学生同士のコミュニケーション能力向上をはかり社会性を養う。

Ⅲ　授業の概要
A.管弦打楽器による合奏　B.フルートを中心とした小編成による合奏
（上記 A.B 間において、学生は適宜移動して授業を受講する）

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	授業説明	年間予定、成績評価方法についての説明、教材としての楽譜準備
2～ 4.	合奏	比較的容易な古典的楽曲の練習 A.B
4～ 6.	合奏	比較的容易な古典的楽曲の練習 C.D
7～ 9.	合奏	比較的容易な古典的楽曲の練習 E.F
10～11.	合奏	比較的高度な近代的楽曲練習 A.B.C
12～13.	合奏	比較的高度な近代的楽曲練習 D.E.F
14～15.	合奏	前期授業における総まとめを行う。
16～19.	合奏	初見試奏の実施、楽曲練習 G.H
20～22.	合奏	初見試奏の実施、楽曲練習 I.J
23～26.	合奏	初見試奏の実施、楽曲練習 K.L
27～28.	合奏	楽曲練習 G.H.I.J.K.L
29～30.	合奏	楽曲練習 G.H.I.J.K.L　総まとめを行い、定期演奏会を実施する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲を教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
演奏会で行う楽曲は、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
合奏への理解と技術				○	
合奏におけるコミュニケーション				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
演奏会を欠席の場合には基本的に単位を与えない。授業計画はあくまで目安である。急遽演奏会等が入ることにより、授業運営・日程・時間に変更が生じることがある。合奏においては各自のコミュニケーションも重要である。その点も重視して授業運営を行う。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽表現研究Ａ（声楽）		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題
他者と協力して演奏できる能力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.それぞれの特性により、独唱・独奏・アンサンブル・アレンジ等に関する諸技術の向上をはかる。
2.作品解釈や演奏表現について理解を深める。
3.諸技術の向上と、より高い次元で解釈や表現が出来る。

Ⅲ　授業の概要
受講生全員のアンサンブルを中心にして指導する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
2.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
3.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
4.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
5.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
6 演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
7.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
8.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
9.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
10.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
11.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
12.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
13.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
14.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
15.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各実技指導担当者が、それぞれの特性に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
特になし。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
諸技術の向上				○	
作品解釈や演奏表現の研究				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
成績評価方法の補足：（注）1/3以上の欠席は単位を認定しない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽表現研究Ａ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**1**	**小林秀子**

吉永哲道

Ⅰ　主題
他者と協力して演奏できる能力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.それぞれの特性により、独唱・独奏・アンサンブル・アレンジ等に関する諸技術の向上をはかる。
2.作品解釈や演奏表現について理解を深める。
3.諸技術の向上と、より高い次元で解釈や表現が出来る。

Ⅲ　授業の概要
受講生全員のアンサンブルを中心にして指導する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.演奏表現の向上１作品	時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
2.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
3.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
4.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
5.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
6.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
7.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
8.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
9.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
10.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
11.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
12.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
13.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
14.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
15.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各実技指導担当者が、それぞれの特性に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
特になし。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	実技試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
諸技術の向上				○	
作品解釈や演奏表現の研究				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
１週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
成績評価方法の補足：（注）1/3以上の欠席は単位を認定しない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽表現研究Ａ（管弦打）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆

Ⅰ　主題
他者と協力して演奏できる能力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.それぞれの特性により、独唱・独奏・アンサンブル・アレンジ等に関する諸技術の向上をはかる。
2.作品解釈や演奏表現について理解を深める。
3.諸技術の向上と、より高い次元で解釈や表現が出来る。

Ⅲ　授業の概要
受講生全員のアンサンブルを中心にして指導する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
2.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
3.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
4.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
5.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
6 演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
7.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
8.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
9.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
10.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
11.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
12.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
13.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
14.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
15.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各実技指導担当者が、それぞれの特性に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
特になし。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
諸技術の向上				○	
作品解釈や演奏表現の研究				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
成績評価方法の補足：（注）1/3以上の欠席は単位を認定しない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽表現研究Ｂ（声楽）		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題
1学年に続き、他者と協力して演奏しながら自己表現出来る能力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.それぞれの特性により、独唱・独奏・アンサンブル・アレンジ等に関する諸技術の向上をはかる。
2.作品解釈や演奏表現について理解を深める。
3.諸技術の向上と、より高い次元で解釈や表現を習得する。

Ⅲ　授業の概要
受講生全員のアンサンブルを中心にして指導する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
2.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
3.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
4.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
5.演奏表現の向上1	各レッスンを受講生が聴き、自らの演奏解釈や技術向上の糧とする。
6 演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
7.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
8.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
9.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
10.演奏表現の向上2	発声法の基礎的な事項から、それぞれの楽曲演奏表現法を学ぶ。
11.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
12.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
13.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
14.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。
15.演奏表現の向上3	伴奏ピアノとのアンサンブル、舞台上のマナーなどを幅広く学ぶ。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各実技指導担当者が、それぞれの特性に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
特になし。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
諸技術の向上				○	
作品解釈や演奏表現の研究				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
（注）1/3以上の欠席は単位を認定しない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽表現研究Ｂ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**2**	**小林秀子**

吉永哲道

Ⅰ　主題

1学年に続き、他者と協力して演奏しながら自己表現出来る能力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.それぞれの特性により、独唱・独奏・アンサンブル・アレンジ等に関する諸技術の向上をはかる。
2.作品解釈や演奏表現について理解を深める。
3.諸技術の向上と、より高い次元で解釈や表現を習得する。

Ⅲ　授業の概要

受講生全員のアンサンブルを中心にして指導する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
2.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
3.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
4.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
5.演奏表現の向上１	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
6.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
7.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
8.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
9.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
10.演奏表現の向上２	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し，各学生の進度に合った授業を行う。
11.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、各学生の進度に合った授業を行う。
12.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
13.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
14.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。
15.演奏表現の向上３	作品・時代背景を考え演奏表現の向上を目指し、 各学生の進度に合った授業を行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各実技指導担当者が、それぞれの特性に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
諸技術の向上				○	
作品解釈や演奏表現の研究				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

（注）1/3以上の欠席は単位を認定しない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽表現研究Ｂ（管弦打）		〔2〕	音	2	井上幸子

仲戸川智隆

Ⅰ　主題
1学年に続き、他者と協力して演奏しながら自己表現出来る能力を養う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.それぞれの特性により、独唱・独奏・アンサンブル・アレンジ等に関する諸技術の向上をはかる。
2.作品解釈や演奏表現について理解を深める。
3.諸技術の向上と、より高い次元で解釈や表現を習得する。

Ⅲ　授業の概要
受講生全員のアンサンブルを中心にして指導する。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
2.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
3.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
4.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
5.演奏表現の向上1	全体の中でそれぞれのパートが果たす役割を意識する。
6 演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
7.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
8.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
9.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
10.演奏表現の向上2	作品解釈に基づいて音色等の表現を考える。
11.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
12.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
13.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
14.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。
15.演奏表現の向上3	幅広い編成のアンサンブルまで経験し、柔軟なアンサンブル能力を得る。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各実技指導担当者が、それぞれの特性に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
特になし。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
諸技術の向上				○	
作品解釈や演奏表現の研究				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
（注）1/3以上の欠席は単位を認定しない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
主科声楽Ａ		〔3〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題

詩・テクストの内容表現と楽曲構造、発声技術を的確に合わせ、より高度な演奏をする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.正確な舞台語発音を習得する。
2.自然で豊かな発声を磨き、音色・音質を多彩にする。
3.詩の内容を自身に取り込み、心理状態を分析し、ピアノ伴奏との関連をもって演奏する。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
2. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
3. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
4. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
5. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
7. ドイツ語の歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
8. オペラアリアなどの歌唱(I)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. オペラアリアなどの歌唱(I)	歌唱練習
10. オペラアリアなどの歌唱(I)	歌唱練習
11. オペラアリアなどの歌唱(I)	歌唱練習
12. オペラアリアなどの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. オペラアリアなどの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. オペラアリアなどの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集
など

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
主科声楽Ｂ		〔3〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題
詩・テクストの内容表現と楽曲構造、発声技術を的確に合わせ、より高度な演奏をする。

Ⅱ　授業の到達目標
1.正確な舞台語発音を実践する。
2.自然で豊かな発声を磨き、多彩な音色・音質で歌唱する。
3.詩の内容・心理状態を分析し、ピアノ伴奏との関連付けて有機的に演奏する。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. モーツァルト作品などの歌唱	朗読、楽曲分析、歌唱練習
2. モーツァルト作品などの歌唱	歌唱練習
3. モーツァルト作品などの歌唱	歌唱練習
4. モーツァルト作品などの歌唱	歌唱練習
5. モーツァルト作品などの歌唱	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. モーツァルト作品などの歌唱	ピアノ伴奏とのアンサンブル
7. モーツァルト作品などの歌唱	ピアノ伴奏とのアンサンブル
8. オペラアリアなどの歌唱(II)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. オペラアリアなどの歌唱(II)	歌唱練習
10. オペラアリアなどの歌唱(II)	歌唱練習
11. オペラアリアなどの歌唱(II)	歌唱練習
12. オペラアリアなどの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. オペラアリアなどの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. オペラアリアなどの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他( )
配点比率(%)　合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
主科声楽Ｃ		〔3〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

萩原明美

Ⅰ　主題

詩・テクストの内容表現と楽曲構造、発声技術を的確に合わせ、より高度な演奏をする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.舞台語発音を駆使し、明瞭に言葉を届ける。
2.自然で豊かな発声による多彩な音色・音質で、表現豊かに歌唱する。
3.詩の内容、心理状態、ピアノ伴奏を有機的に結び付け、かつ自由に解放された演奏をする。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
2. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
3. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
4. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
5. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
7. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
8. オペラアリアなどの歌唱(III)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. オペラアリアなどの歌唱(III)	歌唱練習
10. オペラアリアなどの歌唱(III)	歌唱練習
11. オペラアリアなどの歌唱(III)	歌唱練習
12. オペラアリアなどの歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. オペラアリアなどの歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. オペラアリアなどの歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集
など

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
主科ピアノＡ		〔3〕	**音**	**1**	**小林秀子**

高瀬健一郎

Ⅰ　主題
本科で習得したピアノ演奏技術、作品理解、音楽性をより高いレベルで再構築させる。

Ⅱ　授業の到達目標
1.作品の内容、作曲家の人間性、時代的背景について理解を深め洞察した作品の音楽性を最大限に表現することを目標とする。
2.ピアノソロのレパートリー、音楽全般の視野を拡げる.
3.ピアノの演奏様式の理解を深める。

Ⅲ　授業の概要
個別実技レッスン形態により基礎的な音楽表現をぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目		内容
1	面談	前期の課題曲の説明と選曲及びテクニック課題の説明。
2～ 8	演奏表現	鍵盤作品、バッハの鍵盤作品、カンタービレとは、
11～15	演奏表現	ルバートとは、メロディ、ハーモニー、伴奏との バランス、初見演奏、ロマン派の作品、ペダル、 リズム、音色、形式などを学ぶ

Ⅴ　使用テキスト・教材等
下記の課題曲を個々の進度に応じて選曲を行う。
1. J.S.バッハ:プレリュードとフーガをオリジナル、又は編曲版で学び
ポリフォニーの構成を理解し、各音部のバランスを音楽的に保つことを学ぶ。
2. エチュード、又は技巧的な小品を1～2曲仕上げ、テクニックの向上をはかりながら
音楽的表現の方法を学ぶ。
3. ロマン派、印象派、又は近代、現代の作曲家の小品を選んで演奏する。
※試験では最初に複旋律の曲より演奏する。

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術的内容の理解	○	○		○	

学期末実技試験での演奏を評価するが、テクニック試験の評価点はそのうちの 10%に相当する。(1回不合格の場合は 5%を 2 回不合格の場合は 10%を減点する。)
また、欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
主科ピアノＢ		〔3〕	**音**	**1**	**小林秀子**

高瀬健一郎

Ⅰ　主題

ピアノ作品に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.テクニック試験を通して基礎能力の向上を目指すと共に、音楽科及び、専攻科前期までに習得した演奏技法を基に、更に洞察力を持つ演奏解釈を伴った表現で、演奏できることを目的とする。
2.作品の内容、作曲家の人間性、時代的背景について理解を深め、洞察した作品の音楽性を最大限に表現することを目標とする。
3.ピアノの演奏様式の理解を深める。

Ⅲ　授業の概要

個別実技レッスン形態。 個々の進度、適応性に応じて行われる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1～ 8.　演奏表現	バロック音楽の演奏法、課題曲の演奏と解釈 古典から近現代の作品通して演奏法の特色を学ぶ。
9～15.　演奏表現	演奏会場を念頭においた演奏と練習方法。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

バロックの作曲家の舞踏組曲、トッカータ、ソナタより1もしくは数曲の多声旋律作品を選択する。
L.V.ﾍﾞｰﾄｰｳﾞｪﾝ、M.ｸﾚﾒﾝﾃｨ、ｳｪｰﾊﾞｰ、ｼｭｰﾍﾞﾙﾄ、ﾌﾙﾒﾝの作品から、ソナタ（速い楽章、又は任意の2つの対照的な楽章）、又はロンド、変奏曲を選択し演奏する。
ロマン派、印象派、又は近代、現代の作曲家より小品を選択。
※試験ではバロックの作品を最初に演奏する。
上記の課題曲を個々の進度に応じて選曲を行う。

Ⅵ　参考書・参考資料

適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術的内容の理解	○	○		○	

学期末実技試験での演奏を評価するが、テクニック試験の評価点はそのうちの 10%に相当する。（1回不合格の場合は 5%を 2 回不合格の場合は 10%を減点する。）
また、欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

マンツーマンの形態で指導するが、より多くの作品、アドヴァイスに触れるため、一組で受講する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
主科ピアノＣ		〔3〕	**音**	**2**	**小林秀子**

高瀬健一郎、吉永哲道

Ⅰ　主題
ピアノ演奏技術、作品理解、音楽性をより高める。

Ⅱ　授業の到達目標
1.本科に習得したピアノ演奏技法を礎に、更に各々が取り上げる作品について深い洞察力を持つ演奏解釈を伴った綿密な表現を学ぶ。
2.作品の内容、作曲家の人間性、時代的背景について理解を深め洞察した作品の音楽性を最大限に表現することを目標とする。
3.古典から現代に至る諸作品の学習を通して芸術と人間形成との接点を見出し,生涯研究の指針を学ぶ。具体的には協奏の体験のために、協奏曲の学習など立体的感覚の養成を目指す。

Ⅲ　授業の概要
個別実技レッスン形態。 個々の進度、適応性に応じて行われる。

Ⅳ　授業計画と内容
1，2よりどちらかを選択し 10 分以上 20 分程度演奏する。
1. ピアノ協奏曲（第 1 楽章又は2、3楽章）、又は自由な選択による。
2. 独奏曲

1.～ 8. 演奏表現 課題曲の演奏と解釈
古典から近現代の作品通して演奏法の特色を学ぶ。
9.～15. 演奏表現 演奏会場を念頭においた演奏・練習方法。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
下記の1，2よりどちらかを選択する。
1. ピアノ協奏曲（第 1 楽章又は2、3楽章）
2. 自由な選択による独奏曲

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術的内容の理解	○	○		○	

学期末実技試験での演奏を評価するが、テクニック試験の評価点はそのうちの 10%に相当する。（1回不合格の場合は 5%を 2 回不合格の場合は 10%を減点する。）
また、欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
主科管楽器Ａ		〔3〕	**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、塚本陽子、矢辺新太郎
中川忍、星野舞子、小久保まい

Ⅰ　主題
専攻楽器の演奏技術を習得し芸術的表現を深める。

Ⅱ　授業の到達目標
1.各楽器が独自に持っている表現力に必要な、高度な演奏能力を習得する。
2.難度の高い楽曲を積極的に取り入れて表現力の拡充を図る。
3.作品の芸術的内容に対する理解を深めて、音楽的表現のための技術を学ぶ。

Ⅲ　授業の概要
実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容
※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項　目	内　容
1. 面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2. 基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のための有効な練習方法の確立することを目的に、授業を行う。
3. 〃	
4. 〃	
5. 個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。場合により練習曲の有効な活用を計る。
6. 〃	
7. 〃	
8. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9. 〃	
10. 〃	
11. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。無伴奏ならばその限りではない。
12. 〃	
13. 〃	
14. 〃	
15. まとめ	試験前最後の授業として総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
学期末実技試験では、演奏時間が基本的に 12 分前後に収まる曲目を選択することが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
主科管楽器Ｂ		〔3〕	**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、塚本陽子、矢辺新太郎
中川忍、星野舞子、小久保まい

Ⅰ　主題
各楽器の演奏技術を深め、前期より一層の芸術的表現を深める。

Ⅱ　授業の到達目標
1.高度な音楽的表現のために、楽曲の形式の理解も共に深める。
2.さまざまな組曲や各時代のソナタや小品と取り組む。
3.演奏を通して楽曲の形式について理解するように努める。

Ⅲ　授業の概要
実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容
※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項目	内容
1. 面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2. 基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のための有効な練習方法の確立することを目的に、授業を行う。
3. 〃	
4. 〃	
5. 個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。場合により練習曲の有効な活用を計る。
6. 〃	
7. 〃	
8. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9. 〃	
10. 〃	
11. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。無伴奏ならばその限りではない。
12. 〃	
13. 〃	
14. 〃	
15. まとめ	試験前最後の授業として総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
学期末実技試験では、演奏時間が 12 分前後に収まる曲目を選択することが望ましい。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
主科管楽器Ｃ		〔3〕	**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、長瀬正典、矢辺新太郎、中川忍

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.各楽曲の時代的様式も踏まえた高度な芸術的表現を行う。
2.時代的様式まで理解し、その様式を如何に表現するかという観点で演奏技術を学ぶ。
3.高度な音楽的表現と演奏技術の統合を図る

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項　目	内　容
1. 面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2. 基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のための有効な練習方法の確立することを目的に、授業を行う。
3.　〃	
4.　〃	
5. 個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。場合により練習曲の有効な活用を計る。
6.　〃	
7.　〃	
8. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.　〃	
10.　〃	
11. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。無伴奏ならばその限りではない。
12.　〃	
13.　〃	
14.　〃	
15. まとめ	試験前最後の授業として総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験では、演奏時間が基本的に 15 分前後以内に収まる曲目が望ましい。
成績優秀者には、修了演奏会に出演する機会を与える。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
副科声楽Ａ		〔1〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

小林教子、佐藤典子、萩原明美、横山靖代

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.詩の内容と旋律・伴奏を関連付けて表現する。
2.舞台語を丁寧に発音し、子音・母音の詩的表現を導く。
3.明るく響き、伸びのある声を発するため、具体的に体を使うことができる。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 日本歌曲などの演奏(I)	朗読、楽曲分析
2. 日本歌曲などの演奏(I)	歌唱練習
3. 日本歌曲などの演奏(I)	歌唱練習
4. 日本歌曲などの演奏(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
5. 日本歌曲などの演奏(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. ドイツ歌曲などの演奏(I)	朗読、楽曲分析
7. ドイツ歌曲などの演奏(I)	歌唱練習
8. ドイツ歌曲などの演奏(I)	歌唱練習
9. ドイツ歌曲などの演奏(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
10. ドイツ歌曲などの演奏(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
11. 外国語の歌曲などの演奏(I)	原語朗読、楽曲分析
12. 外国語の歌曲などの演奏(I)	歌唱練習
13. 外国語の歌曲などの演奏(I)	ピアノとのアンサンブル
14. 外国語の歌曲などの演奏(I)	ピアノとのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
日本歌曲集
ドイツ歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他の学生のレッスンをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
副科声楽Ｂ		〔1〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

小林教子、佐藤典子、萩原明美、横山靖代

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.詩の内容と旋律・伴奏を関連付けて積極的に表現する。
2.舞台語を明瞭に発音し、子音・母音の詩的表現を明確にする。
3.明るく響き、伸びのある声を発するため、具体的に体を使うことができる。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 日本歌曲などの演奏(II)	朗読、楽曲分析
2. 日本歌曲などの演奏(II)	歌唱練習
3. 日本歌曲などの演奏(II)	歌唱練習
4. 日本歌曲などの演奏(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
5. 日本歌曲などの演奏(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. 外国語の歌曲などの演奏(II)	朗読、楽曲分析
7. 外国語の歌曲などの演奏(II)	歌唱練習
8. 外国語の歌曲などの演奏(II)	歌唱練習
9. 外国語の歌曲などの演奏(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
10. 外国語の歌曲などの演奏(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
11. オペラアリアなどの演奏(I)	原語朗読、楽曲分析
12. オペラアリアなどの演奏(I)	歌唱練習
13. オペラアリアなどの演奏(I)	ピアノとのアンサンブル
14. オペラアリアなどの演奏(I)	ピアノとのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
日本歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集　など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他の学生のレッスンをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
副科声楽Ｃ		〔1〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

小林教子、佐藤典子、萩原明美、横山靖代

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.詩の内容と旋律・伴奏を関連付けて、より具体的に演奏する。
2.舞台語発音を習得し、役柄の心理状態に即した表現をする。
3.明るく響き、伸びのある声で歌い、さらに音色や音質を多彩にする。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 日本歌曲などの演奏(III)	朗読、楽曲分析
2. 日本歌曲などの演奏(III)	歌唱練習
3. 日本歌曲などの演奏(III)	歌唱練習
4. 日本歌曲などの演奏(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
5. 日本歌曲などの演奏(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. 外国語の歌曲などの演奏(III)	朗読、楽曲分析
7. 外国語の歌曲などの演奏(III)	歌唱練習
8. 外国語の歌曲などの演奏(III)	歌唱練習
9. 外国語の歌曲などの演奏(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
10. 外国語の歌曲などの演奏(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
11. オペラアリアなどの演奏(II)	原語朗読、楽曲分析
12. オペラアリアなどの演奏(II)	歌唱練習
13. オペラアリアなどの演奏(II)	ピアノとのアンサンブル
14. オペラアリアなどの演奏(II)	ピアノとのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本（コンコーネ 50 番など）
イタリア歌曲集
日本歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集　など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他の学生のレッスンをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
副科声楽Ｄ		〔1〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

小林教子、佐藤典子、萩原明美、横山靖代

Ⅰ　主題

言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.詩の内容表現と音楽表現を合致させ、完成度の高い演奏をする。
2.発展的な舞台語発音を学び、心理表現を発語より導く。
3.安定した発声を目指し、音色や音質を自由に表現する。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンにより、発展的な声楽表現を学ぶ

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 日本歌曲などの演奏(IV)	朗読、楽曲分析
2. 日本歌曲などの演奏(IV)	歌唱練習
3. 日本歌曲などの演奏(IV)	歌唱練習
4. 日本歌曲などの演奏(IV)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
5. 日本歌曲などの演奏(IV	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. 外国語の歌曲などの演奏(IV)	朗読、楽曲分析
7. 外国語の歌曲などの演奏(IV)	歌唱練習
8. 外国語の歌曲などの演奏(IV)	歌唱練習
9. 外国語の歌曲などの演奏(IV)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
10. 外国語の歌曲などの演奏(IV)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
11. オペラアリアなどの演奏(III)	原語朗読、楽曲分析
12. オペラアリアなどの演奏(III)	歌唱練習
13. オペラアリアなどの演奏(III)	ピアノとのアンサンブル
14. オペラアリアなどの演奏(III)	ピアノとのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

声楽教則本（コンコーネ 50 番など）
イタリア歌曲集
日本歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集　など

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

他の学生のレッスンをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
副科ピアノA		〔1〕	**音**	**1**	**小林秀子**

安間秋津、石川晴恵、沖教仁

Ⅰ　主題
ピアノ作品を演奏し基本的な演奏法を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.正確な読譜力を身に付けて楽譜から音楽の内容を洞察する力を養い、作品の内容を理解を深める。
2.自分なりの曲想を考え、表現するピアノの演奏技術の向上を目指す。
3.古典派のソナタ形式で書かれた作品をとりあげ、古典派音楽、更には作曲家の特徴を捉え、自らの曲想を表現する事を目標とする。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンだが、より多くの作品とアドバイスに触れるため、4人一組で受講する。
楽曲は、クーラウ、デュセック、ハイドン、モーツァルト等をはじめ、ベートーヴェンの中期までの作品よりソナタ形式、或いはソナタ形式に準ずる形式を持つ楽章を選択する。

Ⅳ　授業計画と内容
1)　ガイダンス　曲決め。レッスンの進め方と、レッスンノートの記入方法について。
2)～5)　読譜と表現　正確に譜を読み、形式構造を理解する。
練習しながら特徴的な和音、或いは休符等に注目して、作曲家がそれらによって意図した事を考える。そして、その解釈をどのように表現するか考えていく。
6)～8)　表現の徹底　自分なりの表現を試行錯誤しながら固めていく。更に、自分の望む音を出すためにはどのような練習が必要なのかを考える一方、その作曲家の他の作品を聴く等して、その作曲家の作風にあった演奏表現についても研究を重ねたい。
9)～5)　仕上げ　自分なりの解釈が「聴き手へ伝わること」を念頭に練習と検証を重ねていく。
試験　暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が適宜指定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
ピアノの演奏技術	○			○	
楽曲への理解と探究心	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

学期末の実技試験での演奏によって評価する。
但し、欠席回数が授業回数の3分の1以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、試験の受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
副科ピアノＢ		〔1〕	**音**	**1**	**小林秀子**

安間秋津、石川晴恵、沖教仁

Ⅰ　主題

ピアノ作品を演奏し基本的な演奏法を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.正確な読譜力を身に付けて楽譜から音楽の内容を洞察する力を養い、作品の内容を理解する力を養う。それをもとに自分なりの曲想を考え音として表現する方法を学んで表現するために、ピアノの演奏技術の向上も目指す。
2.本科目ではロマン派やその時代のヨーロッパ諸国、或いは世紀末?20 世紀初頭にかけての作曲家の小品を取り上げ、内容を理解し曲想をとらえた演奏を目指す。
3.フレーズの歌い方やペダルの使い方を学び、音のバランスのとれた演奏を修得する。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンだが、より多くの作品とアドバイスに触れるため、4人一組で受講する。
　楽曲は、シューベルト、メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、ブラームスを　はじめ、ドビュッシー、ラヴェル、グリーク、チャイコフスキー等の作品の中から選択する。

Ⅳ　授業計画と内容

1)～ 4) 読譜と表現	正確に譜を読み、形式構造を理解する。 音や強弱法、発想標語等に注目し、作曲家がそれらによって 意図した事を考え、そこから導いた自分なりの解釈や気持ちを どう表現するかを考えていく。
5)～ 8)表現の徹底	自分なりの表現を試行錯誤しながら固めていく。 自分のイメージにあった音を出す事に積極的に挑戦し、 曲の一ジ作りに繋げる。 弾き込んで音楽の流れの揺れを自然に感じられるようにしたい。
9)～15) 仕上げ	自分なりの解釈が「聴き手へ伝わること」を念頭に練習と 検証を重ねていく。
試験	暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が適宜指定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
ピアノの演奏技術	○			○	
楽曲への理解と探究心	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

学期末の実技試験での演奏によって評価する。
但し、欠席回数が授業回数の3分の1以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、試験の受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
副科ピアノC		〔1〕	**音**	**2**	**小林秀子**

安間秋津、石川晴恵、沖教仁

Ⅰ　主題
ピアノ作品を演奏し基本的な演奏法を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.正確な読譜力を身に付けて楽譜から音楽の内容を洞察する力を養い、作品の内容を理解する力を養う。それをもとに自分なりの曲想を考え音として表現する方法を学んで表現するために、ピアノの演奏技術の向上も目指す。
2.本科目では、専攻科修了後の自分の活動に向けて自分なりの音楽感を持ち、音楽的な総合力を養うため、作品を高い完成度で仕上げることを目標とする。
3.ピアノ作品の視野を広げ理解を深める。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンだが、より多くの作品とアドバイスに触れるため、4人一組で受講する。
楽曲は個々の学生にあわせ自由に選択する。よって、自分の研究分野、或いはそれに関連する作曲家や作品を取り上げ、研究の一助とすることも考えられるだろう。
しかしその際、主題と目標が達成できるよう、選曲には十分な配慮が必要である。
教員採用試験受験者は、採用試験での指定曲の指導を行う。

Ⅳ　授業計画と内容
1)～ 4)　読譜と表現　　正確に譜を読み、形式構造を理解する。
その作品が作曲された時代とその特徴・様式等を研究し、それらにあった演奏表現を考える。
5)～ 8)　表現の徹底　　楽譜を注意深く読み解き、自分なりの表現を試行錯誤しながら固めていく。練習方法を考えたり、その作曲家の他の作品を聴くことも、大きなヒントとなるだろう。
9)～15)　仕上げ　　自分なりの解釈が「聴き手へ伝わること」を念頭に練習と検証を重ねていく。
試験　　暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が適宜指定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
ピアノの演奏技術	○			○	
楽曲への理解と探究心	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

学期末の実技試験での演奏によって評価する。
但し、欠席回数が授業回数の3分の1以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、試験の受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
副科ピアノＤ		〔1〕	**音**	**2**	**小林秀子**

安間秋津、石川晴恵、沖教仁

Ⅰ　主題

ピアノ作品を演奏し基本的な演奏法を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.正確な読譜力を身に付けて楽譜から音楽の内容を洞察する力を養い、作品の内容を理解する力を養う。それをもとに自分なりの曲想を考え音として表現する方法を学んで表現するために、ピアノの演奏技術の向上も目指す。
2.本科目では、専攻科修了後の自分の活動に向けて自分なりの音楽感を持ち、音楽的な総合力を養うため、作品を高い完成度で仕上げることを目標とする。
3.ピアノ作品の理解を深め視野を広げる。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンだが、より多くの作品とアドバイスに触れるため、4人一組で受講する。
楽曲は個々の学生にあわせ自由に選択する。よって、自分の研究分野、或いはそれに関連する作曲家や作品を取り上げ、研究の一助とすることも考えられるだろう。
しかしその際、主題と目標が達成できるよう、選曲には十分な配慮が必要である。
又、1年を通して似たような作品を選択しないよう、時代を変えたり、例えばロマン派の中でも異なる特徴を持つ作品を選択する等、配慮すること。

Ⅳ　授業計画と内容

1)～ 4)	読譜と表現	正確に譜を読み、形式構造を理解する。その作品が作曲された時代とその特徴・様式等を研究し、それらにあった演奏表現を考える。
5)～ 8)	表現の徹底	楽譜を注意深く読み解き、自分なりの表現を試行錯誤しながら固めていく。練習方法を考えたり、その作曲家の他の作品を聴くことも、大きなヒントとなるだろう。
9)～15)	仕上げ	自分なりの解釈が「聴き手へ伝わること」を念頭に練習と検証を重ねていく。
試験		暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が適宜指定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
ピアノの演奏技術	○			○	
楽曲への理解と探究心	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

学期末の実技試験での演奏によって評価する。
但し、欠席回数が授業回数の3分の1以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、試験の受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
学内演奏（声楽）	**〔4〕**		**音**	**2**	**岩下晶子**

萩原明美

Ⅰ　主題
大学生活の総決算として 社会に通用する演奏能力を身につける。

Ⅱ　授業の到達目標
1.専攻科１年で習得した演奏技術・演奏表現を礎に高度な演奏を目指す。
2.終了論文Ⅱと連動して作曲家や作品の背景などの解釈が出来るようにする。
3.自分でアナリーゼ した楽曲を演奏表現に生かせるようにする。

Ⅲ　授業の概要
講師の個人指導による毎週の実技レッスンの継続。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. 読譜	楽譜を読み、作品の概略を知る。
2. 読譜	楽譜に書かれた情報から作曲者の意図を考える。
3. 読譜	楽譜に書かれた情報から作曲者の意図を考える。
4. 読譜	どのように演奏すべきか練習の組み立て。
5. 演奏練習	練習に取り掛かる。
6. 演奏練習	練習方法を工夫し、意図する表現の実現に向けて練習。
7. 演奏練習	練習方法を工夫し、意図する表現の実現に向けて練習。
8. 演奏練習	修正を加えながら、意図する表現の実現に向けて練習。
9. 演奏練習	修正を加えながら、意図する表現の実現に向けて練習。
10. 実技試験準備	より緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
11. 実技試験準備	より緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
12. 実技試験準備	より緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
13. 実技試験準備	演奏会場を念頭に置いて練習方法で完成に向けて。
14. 実技試験準備	演奏会を念頭に置いた練習。伴奏と共に練習。
15. 実技試験準備	演奏会を念頭に置いた練習。伴奏と共に練習。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各自の演奏力量にあった曲を選曲する。

Ⅵ　参考書・参考資料
曲の作曲家に関する文献、書籍、CD等。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	100				
演奏テクニックレベル	○				
演奏表現	○				
作品の解釈	○				

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。
作曲家、作品について文献等に当たって、時代背景などの理解を深める。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
1/3以上の欠席があるか、期末試験の際に自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
学内演奏（ピアノ）	**〔4〕**		**音**	**2**	**小林秀子**

高瀬健一郎、吉永哲道

Ⅰ　主題
大学生活の総決算として 社会に通用する演奏能力を身につける。

Ⅱ　授業の到達目標
1.専攻科１年で習得した演奏技術・演奏表現を礎に高度な演奏を目指す。
2.終了論文Ⅱと連動して作曲家や作品の背景などの解釈が出来るようにする。
3.自分でアナリーゼ した楽曲を演奏表現に生かせるようにする。

Ⅲ　授業の概要
講師の個人指導による毎週の実技レッスンの継続。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 読譜	楽譜を読み、作品の概略を知る。
2. 読譜	楽譜に書かれた情報から作曲者の意図を考える。
3. 読譜	楽譜に書かれた情報から作曲者の意図を考える。
4. 読譜	どのように演奏すべきか練習の組み立て。
5. 演奏練習	習に取り掛かる。
6. 演奏練習	習方法を工夫し、意図する表現の実現に向けて練習。
7. 演奏練習	習方法を工夫し、意図する表現の実現に向けて練習。
8. 演奏練習	正を加えながら、意図する表現の実現に向けて練習。
9. 演奏練習	正を加えながら、意図する表現の実現に向けて練習。
10. 実技試験準備	り緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
11. 実技試験準備	り緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
12. 実技試験準備	・練習を繰り返す。
13. 実技試験準備	奏会場を念頭に置いて練習方法で完成に向けて。
14. 実技試験準備	奏会を念頭に置いた練習。伴奏と共に練習。
15. 実技試験準備	奏会を念頭に置いた練習。伴奏と共に練習。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各自の演奏力量にあった曲を選曲する。

Ⅵ　参考書・参考資料
曲の作曲家に関する文献、書籍、CD等。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	実技試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	100				
演奏テクニックレベル	○				
演奏表現	○				
作品の解釈	○				

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。
作曲家、作品について文献等に当たって、時代背景などの理解を深める。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
1/3以上の欠席があるか、期末試験の際に自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
学内演奏（管楽器）	〔4〕		**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、長瀬正典、矢辺新太郎、中川忍

Ⅰ　主題
大学生活の集大成として 社会に通用する演奏能力を身につける。

Ⅱ　授業の到達目標
1.専攻科１年で習得した演奏技術・演奏表現を礎に高度な演奏を目指す。
2.修了論文Ⅱと連動して作曲家や作品の背景などの解釈が出来るようにする。
3.自分でアナリーゼ した楽曲を演奏表現に生かせるようにする。

Ⅲ　授業の概要
講師の個人指導による毎週の実技レッスンの継続。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. 読譜	楽譜を読み、作品の概略を知る。
2. 読譜	楽譜に書かれた情報から作曲者の意図を考える。
3. 読譜	楽譜に書かれた情報から作曲者の意図を考える。
4. 読譜	どのように演奏すべきか練習の組み立て。
5. 演奏練習	練習に取り掛かる。
6. 演奏練習	練習方法を工夫し、意図する表現の実現に向けて練習。
7. 演奏練習	練習方法を工夫し、意図する表現の実現に向けて練習。
8. 演奏練習	修正を加えながら、意図する表現の実現に向けて練習。
9. 演奏練習	修正を加えながら、意図する表現の実現に向けて練習。
10. 実技試験準備	より緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
11. 実技試験準備	より緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
12. 実技試験準備	より緻密に完成に向けて演奏・練習を繰り返す。
13. 実技試験準備	演奏会場を念頭に置いて練習方法で完成に向けて。
14. 実技試験準備	演奏会を念頭に置いた練習。伴奏と共に練習。
15. 実技試験準備	演奏会を念頭に置いた練習。伴奏と共に練習。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各自の演奏力量にあった曲を選曲する。

Ⅵ　参考書・参考資料
曲の作曲家に関する文献、書籍、CD等。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	100				
演奏テクニックレベル	○				
演奏表現	○				
作品の解釈	○				

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
1 週間ごとにある授業（レッスン）で有意義な指導を受けられるよう、準備を充分にすること。
作曲家、作品について文献等に当たって、時代背景などの理解を深める。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
1/3以上の欠席があるか、期末試験の際に自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
修了論文Ⅰ	**〔2〕**		**音**	**1**	**金子建志**

Ⅰ　主題

2 年時の修了論文および、学位授与機構に提出する 1000 字レポートを纏めるための下準備を目標とする。音楽雑誌等の記事は、随筆的な文章が多く、インターネットの記述は、資料的な根拠が不確かで、論文には適さない。学生がこうした問題点に気付き、自身の力で、論文に相応しい論理的な記述が出来るようになることを目指す。

Ⅱ　授業の到達目標

1.前期の試験曲を 1000 字レポートの形式にまとめる。9月、成績発表の登校日に提出。
2.後期の試験曲を 1000 字レポートの形式にまとめる。後期の最終授業時に提出。
3.2 年時の 1000 字レポートと、20 枚の修了論文に向けて論文作成の基本知識を整える。

Ⅲ　授業の概要

試験曲の研究発表とゼミ形式の質疑応答。他の学生の発表の分析と採点。
専攻科2年生との合同授業なので、先ず、2年生の発表を聴き、それをディベートを模した採点表で採点することで、評価の方法を学ぶ。その際、面接試験の試験官の立場となって、発表者に対して交代で質問する。2年生の発表が一段落した段階で、今度は、1年生が発表する側にまわり、試験曲について 1000 字レポートの形式で纏め、2～3人交代で発表する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.　1000 字レポートの添削	前年度に出したレポートの添削・指導
2.　文章の基本	論文的な記述について
3.　参考文献	参考文献の検索、引用や譜例の扱い
4～13.　2年生の発表を聴講・1	2年生の発表に対する質問と採点 13 に模擬 1000 字レポート提出
14.　発表・1	模擬 1000 字レポートによる発表
15.　発表・2	同
16～25.　2年生の発表を聴講・2	2年生の発表に対する質問と採点
26.　面接試験報告会	2年生が、後輩に学位面接試験の体験を報告
27.　発表・3	模擬 1000 字レポートによる発表
28.　発表・4	同
29.　発表・5	同
30.　発表・6	同

Ⅴ　使用テキスト・教材等

〔改訂新版〕音楽の文章術　　ウィンジェル　　音楽乃友　　2014　　9784393937853

Ⅵ　参考書・参考資料

「新・西洋音楽史」上・中・下　　グラウト／パリスカ　　音楽之友社

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（レポート）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(実技)
配点比率(%)　　合計 100	30	20	40	10	
作品に対する知識、意欲、理解度	○	○	○	○	
文章力・文章表現に対する向上心	○	○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

自分の専攻に限ることなく、音楽関係の書籍をできる限り広く読んでおくことが望ましい。
音楽雑誌やインターネットの記述は、あくまでも入門書と考え、専門書や研究論文を読むように心掛けること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

音楽雑誌、ラジオやテレビの音楽番組を試聴することによって、現在の音楽界の状況を把握しておくのが望ましい。CD を聴くだけではなく、コンサートにも積極的に出掛けるように。自分の専攻に限ることなく、広い範囲に目を配り、情報交換を心掛けること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
修了論文Ⅱ	〔2〕		**音**	**2**	**金子建志**

Ⅰ　主題

400 字×20 枚の修了論文、および、学位授与機構に提出する 1000 字レポートを完成させ、学士の取得を最終目標とする。音楽雑誌等の記事は、随筆的な文章が多く、インターネットの記述は、資料的な根拠が不確かで、論文には適さない。学生がこうした問題点に気付き、自身の力で、論文に相応しい論理的な記述が出来るようになることを目指す。

Ⅱ　授業の到達目標

1.修了論文要約　4000 字(400 字×10 枚)　〆切り 6月　16 日　(金)　13 時　音楽科講師室に提出とする。
2.1000 字レポート　〆切り 7月　7日　(金)　13 時　音楽科講師室に提出とする。
3.修了論文　8000 字(400 字×20 枚)　〆切り　10 月　27 日　(金)13 時　音楽科講師室に提出とする。2 年時の 1000 字レポートと、20 枚の修了論文に向けて論文作成の基本知識を整える。

Ⅲ　授業の概要

試験曲の研究発表とゼミ形式の質疑応答。他の学生の発表の分析と採点。
専攻科 1 年生との合同授業なので、先ず、2年生が発表を行い、それをディベートを模した採点表で採点することで、評価の方法を学ぶ。その際、面接試験の試験官の立場となって、発表者に対して交代で質問する。2年生の発表が一段落した段階で、今度は、1年生が発表する側にまわり、同様の評価を行う。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1.　仮題目(28 年 3 月に提出済み)	提出済みの左記の仮題目の添削と指導
2.　文章の基本	論文的な記述について
3.　本題目	〆切り 4 月 22 日(金)13 時　音楽科講師室に提出
4～13.　2年生の発表を聴講・1	2年生の発表。質問と採点。 資料は見ても良い。音源の使用も可
14.　1 年生の発表・1	模擬 1000 字レポートによる発表
15.　1 年生の発表・2	同
★1000 字レポートの補講	夏期休暇中に、全員の個別指導を 2 回ずつ行う。
16～25.　2年生の発表(模擬面接)	1000 字レポートを全員に配布し、自身は何も見ずに質問に答える
26.　面接試験報告会	2年生が、本科生を含めた後輩に学位面接試験の体験を報告
27.　発表・1 年生の発表・3	模擬 1000 字レポートによる発表
28.　発表・1 年生の発表・4	同
29.　発表・1 年生の発表・5	同
30.　発表・1 年生の発表・6	同

Ⅴ　使用テキスト・教材等

〔改訂新版〕音楽の文章術　ウィンジェル　音楽乃友　2014　9784393937853

Ⅵ　参考書・参考資料

「新・西洋音楽史」上・中・下　グラウト／パリスカ　音楽之友社

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(レポート)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(実技)
配点比率(%)　合計 100	30	20	40	10	
作品に対する知識、意欲、理解度	○	○	○	○	
文章力・文章表現に対する向上心	○	○	○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

自分の専攻に限ることなく、音楽関係の書籍をできる限り広く読んでおくことが望ましい。
音楽雑誌やインターネットの記述は、あくまでも入門書と考え、専門書や研究論文を読むように心掛けること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

音楽雑誌、ラジオやテレビの音楽番組を試聴することによって、現在の音楽界の状況を把握しておくのが望ましい。CD を聴くだけではなく、コンサートにも積極的に出掛けるように。自分の専攻に限ることなく、広い範囲に目を配り、情報交換を心掛けること。